

令和2年度 学力向上プラン

学校名 中央区立明正小学校

学校の教育目標

よく考える子ども なかのよい子ども 健康な子ども

学校経営方針（確かな学力向上にかかわる内容）

確かな学力の育成

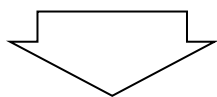
- ・少人数指導や補習教室等で基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得を図る。
- ・問題解決学習の学習過程を設定し、思考力・判断力・表現力等を育成する。
- ・自分から進んで課題に取り組むなど、児童の主体的な学習態度を育成する。
- ・児童同士の交流等を通して自他のよさや可能性に気付かせる。多様性や協働性を重視する。
- ・聞く・話す・発表・まとめる等の言語活動を充実させる。
- ・家庭と連携し、児童の学習習慣を確立する。
- ・言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。

令和元年度「学習力サポートテスト」「東京都学力向上を図るための調査」「全国学力・学習状況調査」の結果分析や、日常の学習の様子等から見られる課題及び要因

	児童・生徒の学力の課題	主な要因
国 語	どの学年も全国平均を上回っている。4・5年は、「書くこと」の領域が区の平均に若干届かなかった。6年は、「書くこと」「読むこと」「話す・聞く」の領域に課題が見られた。	読書に対する関心の個人差が学年が上がるほど大きい。全体的に読書の時間が不足している。文章の理論的な書き方、構成の仕方を学ぶ活動が不足している。
算 数	どの学年もすべての領域・観点において全国平均を上回っている。一方で集団の中でばらつきがあり、学年の平均を押し上げている大きな集団と、中間層・下位層の小集団との二極化の傾向が見られる。 決して低くはないが「関心・意欲・態度」が他の観点と比較すると低い。また、示された場面において、複数の数量から必要な数量を選び、立式する問題にやや課題が見られる。	上位層の集団と下位層の小集団との2極化の傾向が顕著になりつつある。休み時間や放課後を活用した個に応じた指導をさらに充実させる必要がある。他教科（社会・理科・総合的な学習の時間など）の学習において、グラフなどの読み取りを算数の学習と関連付けられていない。日常生活につながる数学的活動がやや不足している。
社 会	読み取る力や解決する力に関して得点をとれない児童が少なからずいる。4年は、「先人の働き」に関する問題、5年は、問題を読み取る力や解決する力、6年は、活用問題や記述で回答する問題に課題がある。	教師が知識を教えたり、教科書で知識を確認したりする指導が多く、児童が自ら問題を設定し問題解決的に学習を進める学習過程が定着していない。児童が自ら資料を収集・選択し、活用する場面が十分に設定されていない。

理科	4年は、「植物の育ち方」に関する問題の正答率が低かった。5年は、観察・技能に課題が見られ、「電気のはたらき」に関する問題の正答率が高くはなかった。6年は、全国平均を下回り、中でも「人のたんじょう」と「ふりこのきまり」に関する問題の正答率が低かった。	自然事象に関する体験が少ない。実際の観察や体験を充実させ、さらに映像や図鑑を活用し、知識・理解を深めていく必要がある。 屋上にある花壇の数を増やしたり自由に観察できる時間を設けたりすることで、栽培活動の充実を図る必要がある。
体育	男女ともにどの学年も握力に大きな課題がある。学年によって「20mシャトルラン」「立ち幅跳び」「反復横跳び」の記録が伸びなかった。	運動経験や運動量に個人差がある。休み時間において、進んで校庭で遊ぶ習慣がついていない児童がいる。また、遊び内容が固定化し偏りが見られる。特に鉄棒・雲梯などで遊ぶ児童は少ない。体育授業において、運動量確保が不十分である。投げる運動や器械運動領域に苦手意識をもち、進んで取り組むのに消極的な児童が見られる。

学力向上に向けた視点	年度末までの目標及び指標
①学力基盤	東京ベーシック・ドリル診断テストの学年正答率を、学年末に80%以上を目指す。読書活動を充実させて、読書量の増加を目指す。
②授業改善	学校評価の自己評価において、授業に関する項目で、A B評価90%を目指す。
③教員の指導力	学校評価の自己評価において、学習指導の項目で、A B評価90%を目指す。
④家庭との連携	学習用具の準備や宿題の達成率を、各学級で学年末に90%以上を目指す。
⑤体力向上	なわとびやマラソン大会における、各種目の記録の向上を目指す。



【目標達成のための具体的な取組内容】

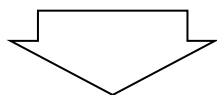
①学力基盤	
取組Ⅰ	基礎・基本の定着を図ることを目的としている「明正タイム」の時間における、内容や方法を充実させる。
取組Ⅱ	東京ベーシック・ドリルや診断テストを活用し、繰り返しによる学習の定着を図ったり、学習状況を個別に把握したりする。休み時間や水曜日の放課後、個人面談期間を利用して算数少数担当による個別の指導を充実させる。
取組Ⅲ	校内研究として取り組む生活科・理科の学習で、主体的・対話的で深い学びのある授業を目指す。

②授業改善	
取組Ⅰ	「中央区小学校授業スタンダード」を授業設計のベースとし、校内で互いに授業公開を図り意見交換をすることで学校全体の授業力向上を目指す。
取組Ⅱ	校内研究を中心として、問題解決型学習の展開を踏まえた学習を共通理解し、各教科の指導に波及させる。
取組Ⅲ	既習事項、身に付けた基礎・基本を活用する場面や考えたことを表現し、学び合う場面を設けた授業を行う。

③教員の指導力	
取組Ⅰ	児童の学習状況を座席シートなどによる記録を基にして授業評価をし、指導の改善を図る。
取組Ⅱ	管理職による授業参観を通して、経験年数や実態に応じた指導力の向上を目指す。
取組Ⅲ	教材研究や授業後の振り返り等のOJTを活発にするために、放課後の時間にゆとりをもたせるとともに毎月一回程度OJT研修会を設定する。

④家庭との連携	
取組Ⅰ	保護者会や学年便り等で学習状況や学校での取組を伝え、発達段階に応じて家庭での学習の協力を依頼する。音読や自主学習ノートなどへの押印や記入などを通して保護者の関わりを増やし、理解と協力を得る。
取組Ⅱ	夏休みの期間を活用し、家庭の理解と協力を得て、基礎的・基本的な学力の定着を目指した夏季学習教室や、体験的な学習を中心としたサマースクールを実施する。
取組Ⅲ	1学期末と2学期末の個人面談において児童の学力・学習状況について具体的な資料をもとにしながら成果と課題を学校と家庭で共有する。今後の指導の方針を明確にし、学校と家庭とで同じ方針をもって児童の指導にあたれるようにする。

⑤体力向上	
取組Ⅰ	「なわとび」は、めあてカードを活用することで年間を通して各個人がめあてをもって取り組めるようにする。また、「なわとび」・「ペーシング」の全校での大会を設定する。実施前に各自の目標をめあてカードに書き、期間を設けて集中して練習に励めるようにする。事後には振り返りをし、成果と課題、今後のめあてを自覚させる。
取組Ⅱ	本校のマイスポーツである「なわとび大会」と「マラソン大会」の取組を公開し、家庭からの理解と協力を得て、児童の意欲喚起を継続して図る。
取組Ⅲ	体育朝会では、長縄の記録会を毎学期設定し、学級ごとに記録向上を目指して練習に励む。



【取組結果の検証】

学力向上に向けた視点	取組の成果	取組の課題
①学力基盤	<ul style="list-style-type: none">・一年間を通して「明正タイム」を活用した漢字・計算練習や算数科の習熟度別少人数指導に取り組み、その結果、各種学力調査等では概ね良好な状態である。・児童が主体的に学びに取り組めるような学習展開にしたことで、話し合い活動や表現活動が充実した。	<ul style="list-style-type: none">・全体的な状況は良好だが、低位層の児童の学力を向上させることが課題である。個別指導の時間を確保したり、習熟度別少人数指導のグループ分けの工夫をしたりする等の取組が必要である。・児童の学びに向かう力である課題発見力、課題解決力、意欲・関心等をさらに高める取組が必要である。
②授業改善	<ul style="list-style-type: none">・学校評価（児童アンケート）における授業に関する項目でA B評価が95%以上であり、良好な状態と言える。・平成30・令和元年度中央区教育委員会研究奨励校としての研究の成果と課題を基に授業を改善した。問題提示・発問・板書・学習評価の工夫、ノート指導、問題解決型の学習過程は、理科・生活科だけでなく他の教科等にも生かすことができている。さらに今年度は児童の自己評価を生かした授業作りに取り組み、児童の主体的に学習に取り組む態度の醸成や思考の深まりが見られてきている。	<ul style="list-style-type: none">・児童の学習状況を適切に評価し、それを基にした授業改善を図るためにも児童に身に付けさせたい資質・能力の評価の在り方についてさらに理解を深める必要がある。・理科、生活科だけでなく、各教科において標準的な指導方法を確立し、教員が共通理解していく必要がある。（授業スタンダードの確立）
③教員の指導力	<ul style="list-style-type: none">・学校評価（教員アンケート）における学習指導に関する5項目でA B評価は、3項目が95%以上、2項目が85%以上であり、良好な状態と言える。・児童の学習状況を單元ごとに記録し、習熟度別のグループ編成や個別指導等に生かすことができたことで、授業中にきめ細かい指導を実施することができた。・管理職・教育センター講師による授業観察や日常的なOJT、任意参加型の校内若手研修会「プチ研修会」により若手教員を中心とした実践的な研修が実施できた。	<ul style="list-style-type: none">・PDCAサイクルによる授業改善ができるようにするため、教師が児童の学習状況を適切に見極め、リフレクションを通して指導の改善を図ることで教員の授業力を高める。・授業観察や研修の前後に、教員が教材研究や指導計画の検討をしたり、研修の成果を実際の授業に生かすように振り返ったりする時間の確保が課題である。・研究授業に限らず日常の授業の相互参観を通して、児童理解・授業力向上の機会を生み出す時間と雰囲気生まれつつあるので、さらに充実させていくことが望まれる。

<p>④家庭との連携</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者会や個人面談等で学習の状況を伝え、家庭学習の協力を要請することができ、協力を得られている。 ・家庭に夏季休業中の学習教室や個人面談期間の補習の実施について、意図と計画を説明し、児童参加の協力を得られた。 ・今年度より評価の観点と方法を具体的に示した「通知表の見方」を作成し、通知表と同時に配布した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年間2回（7月・12月）の個人面談を通して、保護者に学習・生活面の情報を確実に伝え、学校と家庭とで同じ方針をもって弱点の克服にあたる必要がある。
<p>⑤体力向上</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・マイスクールスポーツである「なわとび」については、児童が卒業まで継続使用する「なわとびカード」を作成・配布し、めあてを明確にしたことで、毎月の体育朝会や体育の授業において個人のめあてをもって練習に励む姿が見られるようになった。 ・もう一つのマイスクールスポーツである「ペースランニング」においても競技会を設定し、児童の意欲を大いに喚起した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・握力については依然として課題である。低学年用のうんていを休み時間に使用できるようにしたが、鉄棒等の器械運動についての取組も強化する必要がある。